

菅原道真仮託歌集『瑠璃壺之神詠』（架蔵・寛保二年写）―翻刻と解題―

妹尾好信

〔キーワード〕 菅原道真仮託歌集、瑠璃壺御詠歌、菅家瑠璃壺和歌、菅原道真

〔凡例〕

一 いわゆる菅原道真仮託歌集の一伝本である架蔵の『瑠璃壺之神詠』（寛保二年（一七四二）写）を翻刻し、解題を付した。

一 翻刻にあたっては、次のような処理を施した。

1 変体仮名はすべて現行の字体に改めた。漢字については、できるだけ原本の字体を尊重したが、特殊な異体字は通行の字体に改めた。

2 和歌は、底本では散らし書きにされているものが多いが、翻刻では句順を検討した上で1行に記した。その際、各句ごとに1字空白を置いた。但し、97・98の両首については、原本の表記を再現した上で後の括弧内に句順に従った表記を示した。

3 70番以降の歌には左注のような形で歌の後に説明が書かれているが、和歌よりも高い位置から書かれている。翻刻では和歌

より二字下げとしたが、改行は底本通りにした。

4 序にあたる前書、跋にあたる巻末の識語、系図、奥書等に関しても、底本通りの改行とした。

5 一面の終わりを「(1オ)」「(1ウ)」のように示した。オは丁の表を、ウは裏であることを表す。

6 底本の誤写かと考えられる箇所には、他本を参照して右傍に「(○カ)」のような形で想定される文字を注記した。

7 底本には、54番歌まで歌頭を示す朱の合点が付されているが、翻刻では省略した。

一 各歌の頭に私に通し番号を付した。また、和歌の下の括弧に、竹井和人氏による龍谷大学図書館蔵写字台文庫本の翻刻〔中世和歌の文献学的研究〕所収に付された歌番号を併記した。

〔翻刻〕

瑠璃壺之神詠（外題）

菅家瑠璃壺和歌 全（扉題）

菅原道真公瑠璃壺之御詠百首

瑠璃壺之御詠歌百首者 菅相公政事之餘暇

興詠吟嘯而自取的物艸稿納瑠璃壺器昌泰年

中左遷之時又携一器下筑石隨見興已作觸聽

而感自生之和哥百首改以入壺中聖化上天之後

度會神主飛鳥春彦有故給瑠璃壺

春彦者飛鳥冬綿同胞之弟度會之太神主高主之

子白太夫是也與 菅公友善筑石左遷之時隨下

聖化後隱京師事果而神上焉（1才）

菅相公神靈輝天下北野祠稱聖廟天滿大自在

天神之尊號者現靈神而奉幣祭典住吉八幡三

所者現形而雖交人間威德等天神異諸社荒人

神也於禁中定精進日觸穢 住吉 八幡 北埜之外

古代無其例營也 住吉 八幡之祭禮等有所遺

現靈神之稱號秘事也 天子自精進而御信心日

日新者 天滿宮爾抑荒人神之事三所之外無由

緒 菅家宝藏中聖作神詠之傳也 爲多詩文矣
和哥者少也

此瑠璃壺百首道真公無盡經也金玉之中三十首爲「（1ウ）」

秘歌唯慕久而不得求有因緣師授宜叶

聖意叨莫落凡情見解信仰之輩拓香禮拜唱奉

隨志 神詠天感應護忽而成就諸願者也「（2才）」

「（2ウ）」

1 ふりそは、 ふかくはならし なかくに したよりきゆる
はるのあはゆき（1）

2 かすみても 月やあらめと 思ひよる わか身ひとつは 涙な
りけり（2）

3 佐保姫の かさしのかつら かけてこそ なかき日に咲 花は
みえけれ（3）「（3才）」

4 散まゝの 青葉にしける み山辺の 梢やうすき花のしら雪
（4）

5 うきときや こゝろのたねと なりぬらん 白雲かゝる 小田
の苗代（5）

6 浮世遠波 秋農山風 幾賀之登天 雲古曾月能 隠家尔那禮
(6)

7 かたりてや 家つとにせん ひと枝も おるをゆるさぬ はな
のかへるさ (7) (3ウ)

8 吹かはる かせをたのみて 木かけより ほかにふらぬ 花
のしら雲 (8)

9 散はなを 薪のうへに 吹かけて あらしをおはむ 山人もな
し (9)

10 宵の間に 咲そふはなの 雲見えて 川上かすむ あけかたの
そら (10)

11 行水の 中の小嶋の 川柳 なみのもて來し まゝに植けむ
(11) (4才)

12 明ほの、 いつくさかいと かすむらん はなのあなたの 峯
の松はら (12)

13 河音は 霧消し^{本ノマ、} とたえして 風のかけたる 花のうきはし
(13)

14 ふしのねは 雲より上に 影出て 桮の水に なるさはのみつ
^{月歟本ノマ、} (14) (4ウ)

15 松風の 音をいかてか うつむへき つもらてそふる 月のし
ら雲 (15)

16 みよしの、 桜をうみと みつしほの^い 花の見るめを かつく
山人 (16)

17 誰かために わきて主とや にほふらん 中垣にさく梅のはつ
花 (17)

18 さとまでは ふりもつもらぬ はつゆきを 筏にのせて 下す
袖人 (18) (5才)

19 朝ほらけ はまなのはしは とたえして かすみをわたる は
るの旅人 (19)

20 たかね山 ふもとのくらき 明くれに 霧の上行 秋のたひ人
(20)

21 かけうつす 夕日の名残 なみそめて 紅たゝむ 八重のしほ
かせ (21)「(5ウ)

22 ともすれは 身はうき草の あやめくさ 引れやすきや 心な
るらん (22)

23 さそはれて このやとまでは 月にきつ さのみはいかゝ 夜
も更にけり (23)

24 捨てこし 身にともなは、 月もなと むかしの秋の 思はさ
るらん (24)

25 吹よはる 風よりはるゝ むら雨の 世はさためなき ものと
しらすや (25)「(6オ)

26 人のもつ 薪の上を 雪に見て 山のさむさを おもひこそや
れ (26)

27 わすれては たそといひつる よもすから 嵐のたゝく 柴の
戸ほそを (27)

28 俤を かすみの袖に こめかねて むめのにほひは かせのた
きもの (28)「(6ウ)

29 降雨は 雲より外の 名残にて 嵐にはるゝ 月のうきふね
(29)

30 落椎は あらしをのする 車にて イ秋のみゆきは のるもの見れは 月のみや
ま地 (30)

31 春の江の 月のうき舟 かけてゐて、 風の音する まつの藤な
み (31a)「(7オ)

32 名にさける 梅津のさとの いかなれは かせのふけとも に
ほはさるらん (32)

33 まつかせの かすみの窓を あくる夜に 月さえにほふ 梅の
なつかし (33)

34 月のきる かすみのころも ほころひて はなのはたへの 白
くみえけり (34)

35 ふしのねの たちそふ雲の 靡くらん さのみはいかゝ 烟な
るらん (35)「(7ウ)

36 ことやまの しらへにあまる ふしのねも みあけて久し 月
のうみつら (36)

37 玉くしけ はこねの宮に かくれなく 雲よりうへは なをふ
もにて (37)

38 水とりの はやきなかれに さそはれて たえぬも音の 遠さ
かりゆく (38)「(8オ)

39 夢さそふ 軒端の萩の 風の音に うへ置し秋の ね覚なるら
む (39)

40 しるへせし 軒はのをきの かせもたえ わかれに秋も よも
すからよし (40)

41 夜もすから ひかぬなるこの きこゆるは 月をゆるかす 風
のうきなほ (ナシ)

42 磯山に 峯のまつかせ 吹めくり 波やひくらむ ことの音が
よ (41)「(8ウ)

43 みねに降^{イ見ル} 雪もふる野に とをからす 月の寒さや 風の松は
ら (42)

44 旅人の 馬さへ紀^{オマ}なる たまりみつ あなうの花の 月さはく
なり (43)

45 やとりそひ 山水に かけうつす 桐の替よ はひろの榎^{柏カ}
(44)

46 常盤木と なに思らん 是ほとに 雪のはなさく 松のえたさ
し (45)「(9オ)

47 吹保登波 楚禮土聞衣之 音絶天 嵐遠埋無 雪濃奈原 (46)

48 おとゝしも 去年もことしも 咲花を その日ちりきと たれ
かいひけん (47)

49 しくれてや なか／＼秋を 残すらん もみちにわかぬ みね
の松はら (48)

50 よしこゝろ 思ひもはてよ 捨はてし 身のかへるへき むか
しならねは (49)「(9ウ)

51 ちりそふる 花の木の間の 春風に 出つる月や おほろなる
らん (50)

52 よしなくも 命にかへて おもふなよ 鶯のこゑ 我身の為に
(51)

53 もゝしきの 木々にまきれぬ 花咲て ともしの中の 人もこ
ひしき (52)

54 あちきなや たとへはおもふ ことのみな 叶へたりとも ゆ
めのよのなか (53)「(10オ)

55 かすならぬ 身ほとんやまの おくはなし 人とはぬを か
くれ家にして (54)

56 ふきあけて 空にはなもつ あらしこそ 雲の梢を 風つたふ
なれ (55)

57 五月雨の 信太のもりの かけしけみ 空にしられす ふる雫
かな (56)

58 もろこしを 幾重か雲の へたつらむ とらのときまで いて
ぬ月影 (57)「(10ウ)

59 静なる みやまのおくも なかりけり もとのこゝろを つれ
て來つれば (58)

60 山人の 袖も薪に うつもれて 雪こそくたれ 谷の細道
(59)

61 ふりつみて 舟とは見えぬ 松蔭に 雪をそつなく 浦の蟹人
(60)

62 隔つる 竹の一むら ふりしきて となりを見る 雪の曙
(61)「(11オ)

63 おのつから 木蔭につもる 落葉こそ 風のとりたる 薪なり

けり (62)

64 浦里の 浪のよれかし しほくみて 月をそになふ あきの蟹

人 (63)

65 かけうつる 波を磯へに ふきよせて 月もみねうつ 秋風の

こゑ (64)

66 夜もすから 嵐にまを たゝかれて あくれは庭の 木葉な

りけり (65)「(11ウ)

67 ふけはこく よはれはうすき 梅か香の 嵐にのこる^{イかはる} よはの

手まくら (66)

68 行末も いそかれながら ともすれば 都にかへる わかこゝ

ろかな (67)

69 世の中の うきをならひと いふ人や いとはしとての こゝ

ろなるへし (68)

瑠璃壺秘歌三十首

70 朝ほらけ 須磨のうらはは みえすして かすみにまかふ そ

らの松原 (69)「(12オ)

こゝろつくしの御舟にめされし時海原の明かたかすみてわき
かたければ前途難定生涯無弁ト演らる情分より

出たる御哥なり

71 ひたすらに あらしをうしと おもひなは 吹ぬ間にこそ 花

は散らん (70)

返照常俚

72 咲そへて それとも見えぬ かつらきの はなの余所なる 峯

の白雲 (71)

高賀茂事代主命之神いさをしをよみ給ふ

73 明わたる 志賀のはま松 ほのく^イと さゝ波かけて たつか

すみかな (72)「(12ウ)

唐崎の神垣をしかの濱松と申也

74 月たにも もらぬみ山の 下條に いつふる雪の まより残ら
ん (73)

75 古へは 春のならひに みし月の なみたにかすむ 老は來に
けり (74)

生老病死中に老をいたはる事と哥の情分述懐之第一是也

76 もしほ酌 泪のはまの あまころも ぬれそふ袖や さみたれ
の比 (75) (13才)

涙濱延喜筑石之哥枕に非ス始テ詠給ふ奥意あり

春彦能ク聞リ

77 ものゝふの 矢田野に生る 土筆 弓と暈^{本ノマ}とを 取合けり
(76)

78 いつの時 いつのときにか むすふへき 命や人の はてもし
るらん (77)

卅すゝ也の

元シ豔半

産霊神事者現形阿羅布留天命也 (13ウ)

79 人しれす かゝるうき名の 立ぬるは 硯のうへの ちりやふ
きけん (78)

硯之利生すゞろにて住吉太神御影の移らせ給ふ

也神佛さへ息を屏^{シリフ}給ふなるに凡身穢のいきを吹事可恐ノ教誡

80 枝にふる 雨は梢の 葉を生て ちらぬそ花の 命なりけり
(79)

天育^{タミ}有と云心なり (14才)

81 足曳の 更科山の ゆふ定^{本ノマ}に 雲の衣は あらはれにけり
(80)

哥枕之躰も常に非ス

82 山あいの 朝の雲は 海に似て 波かときけは 松かせの音
(81)

天拝嶽之朝氣色心耳^モ澄旦^モ目前之躰

愁^レ聖意者不可向 (14ウ)

83 夏も猶 雪見る富士の 山かけは けふりの末に 明やすき月
(82)

御詠哥の躰やまひめもまのあたり顯れぬへき神詠也

84 なからふる 身はうき草の 根を絶て 鳴ぬ間は無 水鳥の声
(83)

つくしは冬の夜水鳥のさそふ声につけて
御目さめかちなるを春彦きけり」(15才)

85 むらさきの 花なき時も 野を見れば 萩の戸あけし ふしつ
ほのあき (84)

藤坪の秋を思しやりつ、御詠吟尤哀ふかし

86 中／＼に 吹敷時は 音絶て よはれはそよく をきの上風
(85)

87 老て聞かは いかてうからん 古へを おもはぬたにも をき
の上かせ (86)「(15ウ)

88 なきぬらす 袖にはいか、 やとるへき くもりならはぬ 秋
の夜の月 (87)

89 山のはの 雲の衣を ぬき捨て ひとりや月の すみのほるら
ん (88)

90 ころは秋 時は夕くれ 身は老つ 何に泪の 落とまるへき
(89)

菌化^{アキ}只盤のこ^ツとく腮^ツを机にもたせければ」(16才)
ひたゐにか、せ給ふ

91 はら／＼と あられふる屋の 板廂 苔むすかたは 音も聞へ
す (90)

返照常俚

92 わか影に 残る入江の^{イ命} つなかれて こゝろの駒に 身をそ乗
せたる (91)

93 梓弓 柳のいとも 花咲し ゐる月影に かすみうこかす
(92)「(16ウ)

征西將軍之故事ヲ書給ふ時之御詠歌也

94 春風のおとつれなから あやしけれ かきねの花も かほりそ
ひつ、 (93)

95 梅の匂イ香の すき人ならば 花も見む このみのたねを わりて

すつマな (94)

教誡之中神躰之至極也」(17才)

古今誹諧和哥

ら ん の

96 む さ

す き も

め き 身

の てトカ の

の てトカ な

み ひ てトカ

は の れ

の い ふ

な 後 速

(むめのはな さきての後の 身なれ速はや すきものてのみ ひてヒ
のいふらん) (95)

97 な て し この

う す く も こ

く も ひ く るな

れ は 見 む ひ

と わ き て お

も ひ さ た め

よ

(なてしこの うすくもこくも ひくるヒれは 見むひとわきて
おもひさためよ) (96) (17ウ)

98 こゝろこそ かはらすとても せめて世に しられぬほと

山里も哉 (97)

99 ことはりを よそになしては しる人の 我身のとかに など

まよふらん (98)

瑠璃壺和哥卅首は菅聖御心之據有て人の為ニ

准らへ教給ふ然有共調かすかにたけたかく情箒れり

昌泰の哀れ成年に至りては現影既に周くおほ

るとき也となみくならず世はなれたる神ことを行なは」(18才)

せ給ひ雲隠の後天満天靈至らぬくまなし光りの前に

神形を顕し給春彦の正しう奉逢末の世御哥

とて残れるは多是夢うつゝに告させ給ふ

かくらくのはつせの寺のほとけこそ

北野、神と踊れにけり

唐衣かけて北の、／神そとは袖に持たる

梅にてもしれ

からようのたかひ多し」(18ウ)

聖化昇天之後も跡を垂て周く世之為に

大慈大悲之御名を残し給ひて

南無天満天神と奉唱夫已ならず文才風雅

荒人神ト○申も日本百代ノ末ニ荒人神と祝れんは

我也とて月雪に現形し給こゝろに 天満宮を

奉崇形安らかにして二首を詠せん人には影身に

添んとの御誓ひ春彦能聞り

寛治二年十二月廿五日 三木正一位 大蔵頭爲長」(19才)

爲長家系

宇庭 阿波守

古人 遠江守

清公 文章博士

是善

文章博士

天平元賜官原姓

菅家

侍讀 母伊氏

高規

雅規

山城守

資忠

孝標

定義

是綱

大學頭 正四位下

宣忠

長守

爲長

大蔵

續古今 新千載 新續古今之撰者也

寛保二壬戌歲暮春写之

杜子美詩

天地黯慘忽異色

波濤萬頃堆琉璃

蘇東坡詩

琉璃百頃水仙家

注杭州西湖上有水仙王廟也

案以有故事號琉璃壺者乎

安樂寺之勅使託宣

昔爲北闕被悲士

今作西都雪恥屍

生恨死歛其我奈

從今望足護皇基

」(19ウ)

」(20才)

」(20ウ)

」(21才)

」(21ウ)

〔解題〕

ここに翻刻したのは、〔凡例〕にも記した通り、『瑠璃壺之神詠』と外題する架蔵の写本一冊の全文である。この本は、いわゆる菅原道真仮託歌集（本稿では「家集」ではなくあえて「歌集」と表記する）の一種で、諸伝本を分類された武井和人氏がA系統と名付けられた「寛治2年菅原為長奥書本系統」の一伝本である。

はじめに底本の書誌を記す。

写本一冊。楮紙袋綴。寸法は縦二三・一cm×横一六・七cm。薄茶色無地の表紙左上に茶色無地の題簽を貼り、「瑠璃壺之神詠」と外題。扉題に「菅家瑠璃壺和歌^全」とあり、巻首題に「菅原道真公瑠璃壺之御詠百首」とある。前遊紙一丁あり。墨付二十一丁。字高縦約一九・五cm×横約一三・五cm。前遊紙表右下隅に「谷山藏書」の方形朱印（一辺二・一cm）あり。寛保二年（一七四二）三月写。書写者不明。歌集本体の和歌九十九首（他に巻末識語内に三首あり）。和歌は一面に三首〜四首、独特の散らし書きで書かれている。巻頭二丁余に漢文の前書あり。一面九行書き。巻末に寛治二年（一〇八八）二月二十五日、「三木正二位 大藏頭爲長」の識語があり、続く見開きに「爲長家系」と題する系図を載せる。その後に「寛保二壬戌歲春暮写之」と書写奥書があり、続けて「瑠璃壺」の由来について考証し、杜甫詩ならびに蘇東坡詩とその注を引く。更に丁を改めて「安樂寺之勅使託宣」を載せる。保存状態は概ね良好で、のどに虫損と浸み跡が見

られるが、判読に影響はない。

菅原道真仮託歌集A系統に属する伝本としては、これまでに次の五本の存在が知られている。

- ①東北大学附属図書館狩野文庫蔵『天神御独吟』（四・一〇七三六）所収「瑠璃壺之御詠百首」宝暦三年（一七五三）腰越与兵衛写。
 - ②龍谷大学附属図書館蔵『菅家瑠璃壺和詞』（九・一一三・七四）写字台文庫旧蔵。江戸中期写。武井和人氏「菅原道真仮託家集A系統 解題・翻刻・校異・各句索引」（『研究と資料』第十六輯 昭和61年12月）に翻刻あり。のち、『中世和歌の文献学的研究』（平成元年 笠間書院）に所収。
 - ③実践女子大学山岸文庫蔵『菅公家集』（三・五三・六七三）所収「瑠璃壺之御詠百首」。久保貴子氏「山岸文庫蔵『菅原道真家集類』に関する一考察」（『実践国文学』第40号 平成3年9月）に紹介あり。
 - ④富山市立図書館山田孝雄文庫蔵『菅家御獨吟御連歌／瑠璃壺御詠歌百首付誹諧歌』（五四六六・W九一・二一・カ三四二四）所収「瑠璃壺之御詠百首」。同図書館ホームページにて画像公開。
 - ⑤架蔵卷子本『瑠璃壺之詠歌百首』享保十四年（一七二九）岬山元賢写。拙稿「菅原道真仮託歌集『瑠璃壺之詠歌百首』（架蔵・卷子本）―翻刻と解題―」（『広島大学大学院文学研究科論集』第七九卷〈令和元年12月〉）に全文の翻刻と書誌的な解題を掲載。
- 本書の形態上の特色としては、他の道真・天神関係の書目と合写

されておらず、単独で一冊の写本となっていることであり、他の五本では②龍谷大学本のみが単独の冊子である。⑤の架蔵本も単独ではあるが、卷子本なので形態は全く異なる。②龍谷大学本の外題「菅家瑠璃壺和詞」は、本書の扉題（仮綴段階の表紙にあった題）に一致している（ただし「歌」と「詞」に字体の相違がある）。

巻首に「瑠璃壺之御詠歌百首者」で始まる漢文の前書を置き、巻尾に「瑠璃壺和哥卅首は」で始まる和文の識語と「聖化昇天之後も跡を垂て」ではじまる寛治二年二月大藏頭為長の奥書があり、さらに為長の系図を載せるところは、架蔵卷子本、東北大学本、富山市立図書館本に等しい。武井氏の解題によれば、龍谷大学本には巻尾の識語と奥書はあるが、巻首の前書と奥書の後の系図はないようだが③実践女子大学山岸文庫本は未調査のため前書や識語・奥書等の有無については不明。系図の後にある寛保二年三月の書写奥書に続けて記された杜甫・蘇東坡の詩と「安楽寺之勅使託宣」は底本の書写者による追記とおぼしく、他本にはない。

収載された和歌の数は九十九首で、巻首題に「菅原道真公瑠璃壺之御詠百首」とあり、前書に「瑠璃壺之御詠歌百首」「此瑠璃壺百首」などとある記述と合わず、一首足りない。他本と比較すると、

- 31 春の江の月のうき舟かけて、風の音するまつの藤なみ
32 名にさける梅津のさとのいかなれはかせのふけともにははさるらん

この両首の間に、東北大学本、富山市立図書館本、架蔵卷子本には次の一首が存在する。架蔵卷子本により引用する。

- 32 花染にかすみの袖はなりにけり雲のころものさくら色にて
龍谷大学本には本書と同様この歌はなく、武井氏の翻刻では、「春の江の」の歌を31aとし、東北大学本によって、

「31b 花ぞむるかすみの袖のなかりけり雲の衣のさくら色にて」が補われている。東北大学本と架蔵卷子本では上の句に異同があるが、富山市立図書館本は東北大学本と同一である。東北大学本、富山市立図書館本、架蔵卷子本はこの歌を含めて百首ちようどになっているので、底本と龍谷大学ではこの歌が脱落していると見られる。不備ではあるが、これによって底本と龍谷大学本との近い関係が窺われよう。

ただし、龍谷大学本は、武井氏の翻刻によれば九十八首しかない。これは、龍谷大学本には、底本の41番歌、

- 41 夜もすからひかぬなるこのきこゆるは月をゆるかす風のうき
なは

を欠くためである。同歌は、東北大学本、富山市立図書館本、架蔵卷子本のいずれにも存する（東北大学本、富山市立図書館本は歌句同じ。架蔵卷子本は、結句「風のうきなみ」）。この歌も本来あるべき歌で、武井氏の翻刻通りならば龍谷大学本は二首を欠脱していると言わねばならない。なお、武井氏の解題には、「底本とした龍谷大学本は、歌数が九八首（東北大学本も九八首だが、両本の延べ歌数は九九首）」とあ

るが、東北大学本は百首揃っており、当然延べ歌数は百首である。
武井氏の翻刻では、

15 松風の音をいかてかうつむへきつもらてそふる月のしら雲
について、【校異】で「15コノ歌ナシ」と記されるが、東北大学本
に同歌は存在する。15番歌は、各伝本で、上の句を右半分、下の句
を左半分に分けて縦長の楕円形に文字を配置するという特異な書き
方がされており、集中でも特に目を引く表記法がとられる。武井氏
はこの15番歌と底本の41番歌の存在を見落としたため「東北大学本
も九八首」と誤認されたのではないかと推察される。

さて、共通する欠落歌を有する龍谷大学本と底本は本文的にも近
い関係にあるのではないかと想像される。以下に、前書・識語・本
奥書・系図、71番歌以降の左注を除く和歌本文と傍書に限って、底
本と龍谷大学本（龍）、東北大学本（東）、富山市立図書館本（富）、
架蔵卷子本（巻）との間の主な本文異同を拾ってみる。行頭が底本
の歌番号、傍線部が異同箇所である。

- 2 思ひよる―り（巻）
- 3 佐保姫の―か（龍・東・富・巻）
- 6 散ま、の―に（龍・東・富・巻）
- 7 かたりてや―て（富）
- 8 吹かはる―咲か（龍・吹よ（巻）
- 9 おはむ―ん（東・富）・ぬ（巻）

- 11 もて来し―て（東）・て（富）
- 13 霧消し―しより（東・富・巻）・し（龍）*龍のみ一致
- 14 なるさはのみつ―み？（龍）*龍のみほぼ一致
- 15 しら雲―雪（巻）
- 16 みつしほの―に（東・富・巻）*龍のみ一致
- 17 誰かために―誰ため（東・富）・□かかた（巻）
- 18 下す―る（東・富・巻）*龍のみ一致
- 20 明くれに―更（東・富）・ほの（巻）*龍のみ一致
- 21 かけうつす―すき（巻）
- 23 いか、―し（富）
- 26 上を―に（巻）
- 27 雪に―を（巻）
- 27 たそといひつる―い、けり（巻）
- 29 雲より―の（龍）
- 30 のるもの見れは―秋の物見は（東・富）・秋のみゆきは（巻）
*龍のみ一致
- 31 江の―夜の（東・富・巻）*龍のみ一致
- 32 かけいて、―いて（東）
- 32 さける―は（東・富）
- 34 はたへの―え（巻）
- 35 靡くらん―靡くらむ（龍・東・巻）・靡くらむ（富）
烟なるらん―らし（東・富・巻）・らん（龍）*龍のみほぼ一致

- 36 しらへに―ならへる (巻)
ふしのねも―は (巻)
- 37 みあけて久し月のうみつら― (次歌の下句) (東・富・巻)
*龍のみ一致
宮に―井 (東・富・巻) *龍のみ一致
雲よりうへはなをふもにて― (前歌の下句) (東・富・巻)
*龍のみ一致
- 38 音の―聲 (巻)
夢さそふ―夢さそふ (ミセケチ) (富)
をきの―をき (富)
うへ置し―こいしき (巻)
しるへせし―しるへせし (ミセケチ) (富)
をきの―萩 (富)
うきなは―み (巻)
吹めくり―めくりきて (巻)
ことの音かよ―からことの音 (巻)
みねに降―見る (東・富・巻)・降 (龍)
雪も―雲 (龍)
紀なる―きなる (東・富・巻)・?なる (龍) *龍のみ傍書
一致
- 45 やとりそひ―そひ (東・所か (龍)
かけうつす―うつす (東)
- 48 替よ―に (巻)
椎―柏 (東・富・巻) *龍のみ一致
咲花を―の (東・富・巻) *龍のみ一致
ちりきと―ちきり (東・富・巻) *龍のみ一致
こ、ろ―ち (東)
捨はてし―てはし (東・富・てこ (巻)
春風に―姿 (龍)
かくれ家に―して―る (東)
あらしこそ―に (東・富)
つたふなり―と (巻)
空に―雲 (龍)
幾重か―の (東)・ナシ (富)
袖も薪に―笠も薪も (巻)
うつもれて―ちわ (東)
薪なりけり―る (東・富)
しほくみて―ひ (龍)
かけうつ―す (東・富・巻) *龍のみ一致
みねうつ―岸 (東・富・巻) *龍のみ一致
のこる―かはる (東・富)・のこる (龍) *龍のみほぼ一致
いはしとてのこ、ろなるへし―ナシ (東・富)
須磨の―ナシ (東・富・巻) *龍のみ一致
うらはは―舩は (東・富)・はに (龍) *龍のみほぼ一致

71 ひたすらに―なたすら（富）・はたつら（卷）

うしと―そ（龍）

散らん―けれ（東・卷）・けり（富）＊龍のみ一致

73 かけて―て（龍・東・富・卷）

74 み山の―こよひ（東・富）

下條に―條（東・條（富）

77 土筆―土筆は（卷）

暈とを―筆とを（東・龍・富・卷）

78 時―日の（卷）

ときにか―に（卷）

むすふへき―むすふ（卷）

命や―や（卷）

はても―も（卷）

79 立ぬるは―れ（東・富）

うへの―を（卷）

＊この歌の下句、東北大学本は「硯のうへの／ちりや／ふき
けん」と読むよう番号を付す。武井氏の翻刻もそれにしたがっ
て読まれたようだ。本書の散らし書きの配置からは、「ちり
や硯のうへのふきけん」となるが、意味がとり難い。

80 雨は―そ（卷）

ちらぬそ―らぬ（卷）

命なりけり―り（卷）

81 足曳の―足曳（卷）

ゆふ定に―定（龍）・立（東・富・卷）＊龍のみほぼ一致

82 山あいの―る（東・富・卷）＊龍のみ一致

雲は―霧（卷）

84 きけは―聞（東・富・卷）＊龍のみ一致

なからふる―し（東・富・卷）＊龍のみ一致

86 鳴ぬ間は無―るはむ（龍）・間は無（東・富）・間そなき（卷）

音絶て―信（龍）

をきの―萩（龍・東・富）・萩（卷）

87 聞かは―聞は（龍・卷）・きかは（東・富）

89 山のはの―の（卷）

90 何に―そ（龍）

91 はら―と―ば（東）

92 入江の―入江に（龍）・命を入江の（東・富）・入江の（卷）

94 かきねの―る（龍）

かほり―香（東・富・卷）

そひつ、―、（龍）

95 句の―句（龍）・ゆ（東・富・卷）

すつな―つる（東・富・卷）

96 すきもので―と（龍・東・富・卷）

ひての―と（龍・東・富・卷）

97 ひくるれは―な（龍・東・卷）・ろ（富）

以上の通りで、*印を付して注記したように、校合した四本のうち、龍谷大学本とのみ一致する本文が目につくのである。とりわけ、13・14・30・35・44・45・67に関しては、傍書や異文注記まで一致ないしは類似している。また、13では第三句に同じ歌句の欠損がある。龍谷大学本については武井氏の翻刻に頼っていて原本確認をしておらず、厳密な意味での校合ができていないのが問題ではあるが、先に述べた同一歌が一首欠脱していることも含めて、本文的には底本は龍谷大学本と最も近い関係にあると言いうことができそうである。ただし、龍谷大学本には巻首の前書が存在しないという大きな相違がある他、細かな異同が散見するので、親子や兄弟というような近い関係ではないであろう。ちなみに、本文異同の状況からは、東北大学本と富山市立図書館本がやや近い関係にあり、架蔵卷子本は両グループとは異なる独自本文が多いという性格があることが読み取れる。それはたとえば、69番歌の下のが東北大学本と富山市立図書館本に共通して欠脱している点などに顕著である。

底本の奥書の後に記された考証的な注記について。まず、「琉璃」の語を詠み込んだ「杜子美詩」と「蘇東坡詩」を挙げ、「案以有故事號琉璃壺者乎」とある。「案ずるに故事有るを以て琉璃壺と号する者か」と読むのであろう。「瑠璃壺」の語を冠する本書の名称の由来を両詩に求めたようである。

引用された杜甫詩は、『杜少陵詩集』巻三に載る「漢^び陂^{ひかう}行」と題する二十八句からなる七言古詩の第二聯である。青々とした漢陂池の水の澄み渡つたさまを琉璃を積み重ねたようだと表現している。また、並べて記された蘇東坡詩は、『蘇東坡詩集』巻十に載る「次三韻周長官寿星院同餞二魯少卿」と題する七言律詩の初句である。寿星院の青々と水を湛えた広々とした池を「琉璃百頃」と表現している（両詩の所在と解釈は『統国訳漢文大成』（昭和3年）4年 国民文庫刊行会によった）。詩句の下割書は詩中の「水仙家」に関する注だが、『蘇東坡詩集注』（清・康熙三十七年（一六九八）刊）巻十二・三丁裏に、当該詩とは別の詩にある「水仙」の語に付された「援」湖上有水仙王廟」という注によつたとおぼしい（陳紳氏のご教示による）。書写者は漢学の素養ある人物らしい。

ただし、これらを書名の典拠となつた故事と解するのは無理だろう。「瑠璃壺」の由来については前書に記されている。道真は日頃から政務の余暇に詠んだ和歌を集めた草稿を瑠璃の器に入れていたのだが、昌泰年中の左遷の折にそのうちの一つを携えて筑紫に下つた。その後折に触れての感興を詠んだ和歌を百首、改めて壺の中に入れていた。道真の没後に故あって飛鳥春彦（白大夫）がその瑠璃壺を賜つたのだとある。「瑠璃壺」の書名は、この道真が詠草を入っていた壺にちなむのである。「瑠璃」は、仏教の經典に見える「七宝」の一つで、青色の寶石をいう。普通はラピスラズリという鉱石を指すが、ガラスの古名を「瑠璃」ということもあるらしい。『枕

草子』「うつくしきもの」の末尾に「瑠璃の壺」が挙げられている。瑠璃が壺そのものの素材ならば鉾物ではなく青いガラス製の壺を「瑠璃壺」というのだろう。本書前書にいう「瑠璃壺」も、貴重な物、秘すべき物を入れておくにふさわしいものとして用いられただけで、特に典拠や故事を踏まえたわけではないと考えられる。

そして、最後に掲げられた「安樂寺之勅使託宣」は、よく知られた天神託宣詩である。配流後に詠作された詩を集めた『菅家後集』には、巻尾に付加された三編の詩の末尾に、「被贈太政大臣之後託宣」と題してこの詩が載せられている。『天満宮託宣記』（群書類従）巻第二十・神祇部二十所収）によれば、正暦四年（九九三）十二月十六日、道真に太政大臣を追贈する旨を伝える勅使として安樂寺に遣わされた菅原為理が宣命を読み上げたところ、

昨 為_レ北 闕 被_レ悲 士_一 今 作_二西 都 雪_レ恥 尸_一
生 恨 死 歎 其 我 奈 今 須_三望 足 護_二皇 基_一

という詩で返答があったという（群書類従 第二輯〈昭和七年 続群書類従完成会〉一六六―一六七頁）。この伝承は『北野天神縁起』をはじめ諸書に見える。延慶本『平家物語』（第四・六「安樂寺由來事 付靈驗無双事」）、『太平記』巻第十二の他、『江談抄』（類聚本系巻四・64）、『古事談』（五・一九）、『神道集』（巻九「北野天神事」）などが挙げられるが、年次や人物名の相違、また詩句にも異同が少なくない。末尾の「皇基」は、「皇基」（天皇が統治する国家の基礎の意）の誤り。新潮日本古典集成『太平記二』（山下宏明氏校注）は、この託宣詩を「昨日まで

は皇居に悲嘆をかこつたわが身／今日は鎮西の府に尸の身ながら憂き名をはらす／生前の恨みを死してはらすは心残りだが／望みの満たされた今は国政を守る身とならん」と訳す。本書が何を典拠にこの託宣詩を引用したかは定かでないが、配流後の心境を詠んだ『瑠璃壺和歌』の歌々に、今は恨むことをやめて国家の護りとなろうという託宣詩の思いに通じるところを感じ取って特に書き付けたのであろうか。

以上のように、本伝本には一首の欠脱があり、他本と比べて特にすぐれた本文を持つわけではないが、本文的に近い龍谷大学蔵本の不足を補う部分があること、寛保二年（一七四二）写という、書写年のわかる伝本の中では架蔵卷子本の享保十四年（一七三九）写に次いで古い写本であることなどに意義が見出せる。ここに全文を翻刻して紹介した所以である。

伝本間の本文の詳しい比較・検討については他日を期したい。

***Ruritsubo no Shin-ei*, an anthology of poems attributed to
Sugawara no Michizane (private collection, 1742 edition):
Reprinting and annotation**

Yoshinobu SENO

This reprint is the full text of the manuscript of *Ruritsubo no Shin-ei* in my collection. The book is a type of poetry anthology attributed to Sugawara no Michizane and is a surviving copy of what Kazuto Takei categorized as system A.

This copy consists of 99 *waka* poems, which makes it one short of the original 100. While the text is not particularly superior to other editions, it is significant in that it partly complements the deficiencies of the Ryukoku University edition, which is thought to be close in content. Furthermore, it is from 1742, making it the second oldest manuscript after the 1729 scroll-book edition in my collection.

